

The Forsyte Saga に現われた諸話法

——描出話法を中心に——

布施 敏 夫

I

19世紀に入るや、それまでに一応確立した小説の表現方法も、文化の推移、社会の複雑化、人間生活の多様化といった社会的背景から必然的にその変革を迫られ、ただ目に映る外観を通しての客観的把握だけでは、もはや現実を的確に表現できないということを認識する作家が現われ始めた。彼らの対象は、客観的な現実ではなく、その内面にひそむもの、人間の心の奥底に起こる意識そのものへと向かっていったのである。その結果が心理小説の出現となり、「意識の流れ」派といわれる一群の作家たちを生み、同時に、その目的に応しい表現上の技法への新しい実験となって現われ始めた。彼らの試みた手法は、もちろんそれぞれの作家や作品によって、それ独自の特徴をもってはいるが、その共通した基本的態度は、あくまでも描写の焦点を人間の内部意識におこうとすることにあったといえるであろう。彼らは、それまでの全知の作者による叙述方法から、焦点を傍観者としての作者あるいは作中人物にまで移行することにより、多様な人間の目を通して、現実をあるがままに再現しようとした。作者が表面から姿を消し、作中人物の意識と同化し、あるいは作中人物の意識において描写するというこの新しい手法は文体の面にも影響を与えずにはおかなかった。そのなかで、特に作中人物の意識の移り変わり、内省、独白などの描写や表現によく用いられるものに、いわゆる「描出話法」がある。

作者が、作中人物の意識や心理の中に入り込み、作中人物と融合同化して語ろうとするとき、既成の直接話法や間接話法では十分にその目的を達成できないことも起こりうる。なぜなら、直接話法は作中人物の口のにぼった言葉そのものであり、作者を寄せつけないものであるし、一方、間接話法では作中人物の言葉や考えは、一度作者というふるいにかかけられ、作者の言葉に直されたうえで伝えられるという明確な区別があるからである。特に間接話法では、作者の介入により、話し手の感情は完全に抹殺され、そこに存在するものは、高度に抽象化された客観描写のみとなる。ところが描出話法では、作者は心理的に自分を作中人物と同一視し、その人物の言葉、あるいは心理の動きをその人物の名において語ることができる。形式的には客観性を維持しているけれども、その描写は流動的であり、主観的要素も多分に持ち合わせている。

一般に、時制や人称は地の文と同じであるが、表現そのものの中には、作中人物の人間を感じさせるような語法が多く含まれているのである。

このように、描出話法は小説手法の分野だけでなく、文法とも関係をもつものである。そこで、今まで文法家が描出話法をどのように把握してきたかを概観してみることとする。Jespersen は speech を direct speech と indirect speech の2種類に分類し、後者をさらに dependent speech (従属話法) と represented speech (描出話法) に細分し、次のように説明している。すなわち、dependent speech は伝達動詞に従属しているが、represented speech ではこの従属関係は通例 (as a rule) 全体の文脈から理解できる。描出話法が用いられるのは、外部世界の出来事の関係が、そのときの作中人物の言葉や考えを、しばしば伝達動詞を用いずに、あたかも外部の出来事の直接の継続であるかのように伝達することによって遮断されるときである。作者は、これらの作中人物の言葉や考えを自ら体験するのではなく、読者に描出 (represent) してくれるのであり、彼がこの種の話法を 'represented speech' と呼ぶ理由もここにあるのだといっている。さらに、represented speech は dependent speech より生氣に富み、direct speech に近いので感情的要素も多分に含んでおり、また両者の形態上の相異が現われるのはおもに疑問文と命令文であるといい、この点について詳しく論じている。

Kruisinga はこの話法を 'semi-indirect style' と呼び、時制、人称代名詞、その他すべての間接話法の特徴は変化せずそのまま残っているが、伝達動詞を伴わず、ある場合には semi-indirect style が作者の言葉か判別しにくいことがあるといっている。また、Curme は 'independent form of indirect discourse' という名称を用いて、生き生きした文体では、作者は従属関係を表わすすべての形式上の特徴を用いず、文法上独立した形で作中人物の考え、感情、印象などを再現することがよくあり、その時制は、物語でふつう用いる過去形であるといっている。なお、この種の話法は報道記事にも広く用いられるという指摘は注目に値することであろう。

以上、代表的な文法家の説明をごく簡単にみてきたが、それぞれ名称の相異こそあれ、描出話法を間接話法の一つとみなしている点、さらに通例伝達動詞を欠き、被伝達文は独立した形をとるという点ではいずれも共通している。このように描出話法は、一般的には間接話法の被伝達文が伝達部から遊離独立したものとされているが、しかし、実際にはその遊離の度合いというものに明確な境界線をひくことはなかなか困難なことといわねばならない。これも Palmer が Most of these alterations are of the nature of common-sense semantics independent of considerations of grammar;

tenseconcord however is partly of a grammatical nature. といっているように、話法には文法論だけでは論じきれない面が多分にあり、そこに多様な形式を生む素地があるといえよう。

心理小説作家や「意識の流れ」派の作家たちは、作中人物の心理や意識を描写する手段として、このように表現上の自由をもつ話法、とくに描出話法を有効に用いることによって、彼らの文体を芸術的レベルまで高めることに成功したのであるが、描出話法は心理描写の1技法として、彼ら以前の作家によってもかなり多く用いられていた。古くは、Laurence Stern (1713—68年) から、Jane Austen (1775—1817年)、George Eliot (1818—80年)、George Meredith (1828—1909年)、Thomas Hardy (1840—1928年) など心理小説勃興以前の作家たち、あるいはまた現代の作家たちにもその用例を多く見ることができるのである。その使用法は、「意識の流れ」派の作家のように高度で複雑微妙なものではないが、描出話法の基本の理解には十分な資料を提供してくれている。すでに個々の作家を対象にした Willi Bühler による Jane Austen の研究 (1936年)、Otto Funke による Galsworthy の研究 (1929年) など多くの研究が発表されている。本論では、後者の研究をふまえたうえで、特に The Forsyte Saga に現われた諸話法について補足的考察を試みたいと思う。

Ⅱ

まず、Galsworthy の quotation marks の使用法について触れておきたい。彼は double quotation marks [“ ”] と single quotation marks [‘ ’] の2種類を、それぞれ異なった目的に使用している。前者は、作中人物が実際に口にした発言に用い、その伝達動詞は say, answer, ask が圧倒的に多い。一方後者は、作中人物の心の中に浮かんだ考え、物思い、内省などの描出に用い、その伝達動詞には当然のことながら think, say to oneself, muse, reflect が多用されている。ただ、初期の作品では single quotation marks のみを用いたものが多く、その後の作品では、2種類の quotation marks を併用するようになっていくということは注目しなければならないことである。

The Forsyte Saga においても、3部作の第1部に当たる The Man of Property は single quotation marks のみを用い、他は2種類の quotation marks を用いるといった不統一を生じている (Heinemann の1969年版ではすべて2種類の quotation marks に統一されているが、これは1956年に reset したときに行なわれたものであろう)。これも The Man of Property は1906年に発表されたもので初期の作品に属

し、他はそれから10年以上も経った、1918年から1921年にかけての作品であり、加えて The Man of Property は、当初から3部作の第1部としてではなく、独立した作品として書かれたためであろう。Galsworthyのように幾種類もの話法を用いる作家の場合には、これをただ単に quotation marks の問題としてだけでなく、彼がそこになんらかの表現上の価値を認めた手法のひとつとして有機的に取り扱う必要があらうかと思われる。

以下用例を中心に、直接話法、間接話法、不完全話法、描出話法あるいは地の文がいに融合、調和し、文体上の効果をあげているか検討を加えていきたい。

A. 話の再現に用いられる話法

作中人物が実際に発言した言葉を伝えるのに用いる形式は、The Forsyte Saga においても直接話法が圧倒的に多い。しかし、彼らの発言が story のなかで占める重要性は決して一様なものではなく、従って、その表現形式もそれぞれの場面に応しい形が用いられる。

1) Jolyon's native tenacity was roused, and in the studio that evening he developed his objections. He had never had any boils, and his own teeth would last his time.¹⁾ Of course —June admitted— they would last his time if he didn't have them out! But if he had more teeth he would have a better heart and his time would be longer. His recalcitrance —she said— was a symptom of his whole attitude; he was taking it lying down. He ought to be fighting. When was he going to see the man who had cured Paul Post? Jolyon was very sorry, but the fact was he was not going to see him.²⁾ June chafed. Pondridge —she said— the healer, was such a fine man, and he had such difficulty in making two ends meet, and getting his theories recognized. It was just such indifference and prejudice as her father manifested which was keeping him back. It would be so splendid for both of them!

"I perceive," said Jolyon, "that you are trying to kill two birds with one stone."

"To cure, you mean!" cried June.

15

"My dear, it's the same thing."

Soames の先妻 Irene と再婚した Jolyon には Jon という息子がおり、一方、Irene を奪われた Soames は Annette と再婚し、ふたりの間には Fleur という娘がいる。ところが、この Jon と Fleur との間に恋の芽ばえを知った親たちは、その

不幸なめぐりあわせに心を痛める。Jolyon はふたりを遠ざけようと、Jon と Irene をスペインに旅立たせる。愛する妻や息子と離れ、その孤独に耐え、寂しく暮している Jolyon を気づかう娘 June は、ある日 Robin Hill に父を訪れる。父の歯の悪いことに気づいた June は、彼を自宅に迎えたのち、執拗にその治療を迫る。引用文はこの場面の描写である。

ここでは、ふたりの会話は最初描出話法で書かれ、後で直接話法に移行しているが、描出話法の部分が長いと、どれがどの人物の発言か識別しにくい。このような読者の負担を取り除くため、June の発言にだけ dash で囲んだ伝達部を挿入している。しかし、本来描出話法ははっきりした伝達部を持たないのがその特徴であるので、挿入する場所も通例引用文のように、前後関係、文の口調などから判断して、なるべく目立たないところということになる。なお 1)、2) は Jolyon の発言であり、2 行めから 12 行めまでで地の文は June chafed. だけである。

この引用部分のあとにも、ふたりの会話は直接話法のまま続くのであるが、結局 June の勧めは聞き入れられず、歯の治療についての話は一段落する。ここで作者の介入があり、穏健な Jolyon と、積極的な June の性格や考えの相異について説明する。父と娘の意見は、話題が Jon と Fleur の件に及んで、もはや歩み寄る余地のないことがはっきりしてくる。両家族の過去を Jon に打ち明けるべきだとする June は、父 Jolyon の煮え切らない態度に業を煮やし、自分から Fleur を訪れようと決心する。この最後の部分は再び直接話法で描写されている。このような物語の展開からもわかるように、引用部分は Jolyon と June が Jon に対してとるべき態度を決定するに至る導入の部分に当たる。比較的重要な部分は直接話法で、それほど鮮明に描写する必要のない部分は描出話法を用いて、作中人物の性格を暗示する程度に止めておくことができるわけである。

2) In the third carriage a disjointed conversation was carried on in the intervals of looking out to see how far they had got, George remarking, "well, it was time that the poor old lady 'went'." He didn't believe in people living beyond seventy.¹⁾ Young Nicholas replied mildly that the rule didn't seem to apply to the Forsytes. George said he himself intended to commit suicide at sixty. Young 5 Nicholas, smiling and stroking a long chin, didn't think his father would like that theory; he had made a lot of money since he was sixty.²⁾ Well, seventy was the outside limit; it was then time, George said, for them to go and leave their money to their children.³⁾ Soames, hitherto silent, here joined in; he

had not forgotten the remark about the 'undertaking,' and, lifting his eyelids almost imperceptibly, said it was all very well for people who never made money to talk. He himself intended to live as long as he could. This was a hit at George, who was notoriously hard up.⁴⁾ Bosinney muttered abstractedly "Hear, hear!" and, George yawning, the conversation dropped.

Forsyte 家の最年長者 Aunt Ann の葬儀に参列した一族が、馬車に分乗して教会へ向かう場面である。作者は 1, 2 台めについては、次のように簡単に説明しているにすぎない。

In the first carriage old Jolyon and Nicholas were talking of their will. In the second the twins, after a single attempt, had lapsed into complete silence; both were rather deaf, and the exertion of making themselves heard was too great. Only once James broke this silence:

"I shall have to be looking about for some ground somewhere. what arrangements have you made, Swithin?"

And Swithin, fixing him with a dreadful stare, answered:

"Don't talk to me about such things!"

Roger と young Roger の乗っている 3 台めについては全く触れず、引用文は 4 台め(原文に third とあるのは fourth の誤り) の馬車の様子を描写したものである。この馬車には、George, young Nicholas, Soames, Bosinney の 4 人が同乗している。George は Forsyte 家随一の頼才であるが、スポーツマンらしく屈託のない人物で、彼らの属する上層中流階級を軽蔑している異端的存在であり、「物欲の人」といわれる Soames や、他の Forsyte 家の人々とは相容れない性格の持主なのである。このことが 4 人の会話に軽妙に暗示されている。

まず 1) の文は、形式上独立していて一見作者の報告のように見えるけれども、次の young Nicholas の答えの中にある the rule から明らかなように、実は George の発言の続きである。接続詞を多用しなければならない長い間接話法では、文が冗長になるのを避けるために、接続詞を用いず文を独立させることがよくあるが、ここでは、次に続く客観描写への移行手段と考えられる。2) の文に挿入されている、smiling and stroking a long chin の動きは微妙である。Young Nicholas, smiling and stroking a long chin, said he did not think…。とすれば、伝達動詞もあって外面描写には都合がよいが、次の George の返答に出てくる、Well という会話特有の表現にうまくつながらない。このような場合にこそ、描出話法の妙味が十分発揮さ

れるといえよう。3) の文には、George said という伝達部が挿入されてはいるが、その位置からして全く影の薄い存在であり、George の言葉であるという指標にすぎない。4) は、1) のところで述べたように、長い間接話法を避けるために前文から独立させたもので、Soames の言葉である。このように、作者の客観描写に基調を置きながらも、それぞれの段階に応じて「話（わ）の再現」方法にいろいろ工夫をこらし、その持ち味を十分に活用することによって、調和のなかに適度の変化を織り込むことができるのである。

3) Soames then went into the box. His whole appearance was striking in its composure. His face, just supercilious enough, pale and clean-shaven, with a little line between the eyes, and compressed lips; his dress in unostentatious order, one hand neatly gloved, the other bare. He answered the questions put to him in a somewhat low but distinct voice. His evidence cross-examination 5 savoured of taciturnity.

"Had he not used the expression, 'a free hand'?"

"No."

"Come, come!"

The expression he had used was 'a free hand in the terms of this correspondence'.

"Would he tell the court that that was English?"

"Yes!"

"What did he say it meant?"

"Was he prepared to deny that it was a contradiction in terms?" 15

"Yes."

"He was not an Irishman?"

"No."

"Was he a well-educated man?"

"Yes!" 20

"And yet he persisted in that statement?"

"Yes."

Throughout this and much more cross-examination, which turned again and again around the 'nice point', James sat with his hand behind his ear, his eyes fixed upon his son. 25

引用文は、Soames に対する Bosinney 側の反対訊問であるが、Soames が言葉少なく、かつ巧妙にその反対訊問を切り抜ける様子がいかにも簡潔に描写されている。quotation marks を用いてはいるが、時制、人称に間接話法を用いることによって一種の落ち着きを与え、また伝達部のないことが緊張感だけでなく、Soames の ‘taciturn’ な態度まで感じさせる。なお、The expression he had used was a ‘free hand in the terms of this correspondence’ は quotation marks に囲まれていないが、前後関係からみて Soames 自身の言葉と解釈したい。ただ、このあとに問答が続いていなければ、完全な地の文とも解釈できるところから、それとなく作者の存在をも感じとれる部分である。ところが、Charles Scribner’s Sons (New York) 版の Galsworthy Reader では、引用部分を次のように書き換えている。

Had he not used the expression, “a free hand”?

“No.”

“Come, come!”

The expression he had used was ‘a free hand in the terms of this correspondence.

“Would you tell the court that that was English?”

“Yes!”

“What do you say it means?”

“What it says!”

“Are you prepared to deny that it is a contradiction in terms?”

“Yes.”

“You are not an Irishman?”

“No.”

“Are you a well-educated man?”

“Yes.”

“And yet you persist in that statement?”

“Yes.”

このことは、実際の間答をこのような不完全話法で表現することに、かなりの抵抗があることを示しているといえよう。しかしこの場合には、直接話法に変えたと、かえって全体の調和を失う恐れがある。なぜなら、引用文の前には Soames 側の弁護人による弁論があり、その前半は直接話法だが、後半は描出話法となって引用文に続いているし、このあとに続く Bosinney 側の弁論も、dash に囲まれた he said という伝達部はあるが、30数行にわたって描出話法で書かれているからである。Bosinney

の欠席を除いては、全般的に特に取り立てるほどの波乱もなく、平静のうちに進んでいる法廷の描写には、多少の単調さは免れないが、不完全話法を用いるほうが応しいのではあるまいか。

B. 内省表現に用いられる話法

描出話法は話の再現に用いられる以上に、作中人物の微妙な心理の動き、心の奥底にひそむ意識の描写に有効な表現手段である。前にも触れたように、Galsworthy は描出話法の他に、single quotation marks を用いた直接話法を内面描写に用いているが、これらがいかに有機的にかかわりあって、その効果を発揮しているか考えてみたい。

1) On the seventh afternoon he thought: 'I must go up and get some boots.' He ordered and Beacon set out. Passing from Putney towards Hyde Park, he reflected: 'I might as well go to Chelsea and see her.' And he called out: "Just drive me to where you took that lady the other night." The coachman turned his broad red face, and his juicy lips answered: "The lady in grey, sir?"

"Yes, the lady in grey." What other ladies were there! Stodgy chap!

The carriage stopped before a small three-storeyed block of flats, standing a little back from the river. With a practised eye old Jolyon saw that they were cheap. 'I should think about sixty pound a year,' he mused; and, entering, he looked at the nameboard. The name 'Forsyte' was not on it, but against 'First Floor, Flat C' were the words: 'Mrs. Irene Heron.' Ah! She had taken her maiden name again! and somehow this pleased him. He went upstairs slowly, feeling of drag and fluttering there. She would not be in! And then—boots! The thought was black. What did he want with boots at his age? He could not wear out all those he had.

"Your mistress at home?"

"Yes, sir."

"Say Mr. Jolyon Forsyte."

"Yes, sir, will you come this way?"

Irene の美しさに心を惹かれた old Jolyon は、外出の途中予定を変更して彼女を Chelsea にある小さなアパートに訪れる。引用文からもわかるように single quotation marks に囲まれた直接話法は、作中人物のかなりはっきりした考えを表わし、その内容も理路整然としている。'I must go up and get some boots.' という考えは

He ordered and set out. 'I might as well go to Chelsea and see her.' は he called out: "Just drive me to where you took the lady the other night." という行動に直結している。'I should think about sixty pound a year.' は、Irene の住むアパートの値踏みをして自分にいい聞かせている独り言である。このように、think, reflect, museなどを伝達動詞とする single quotation marks の直接話法は、意識のなかでも表面的で、かなり明確な形を整えたものの描出であり、心の中で語られた言葉といえよう。それ故、物語の筋の枠内にあり、それから外れて独り歩きするようなことはない。

一方、描出話法は作中人物の意識の奥底にあるもの、あるいはその過程を描く。What other ladies were there! Stoddy chap! は、"Just drive me to where you took that lady the other night." という指示に、馭者が "The lady in grey, sir?" と聞き返したことに對して old Jolyon の心の中に起こった反応である。言葉の上では、"Yes, the lady in grey." と平静を保ってはいるものの、内心はわかりきったことを聞き返した馭者に対して、憤懣やるかたなしといった状態なのである。この old Jolyon の心中に作者が入り込み、感情移入させながら描写したもので、われわれ読者は、作者よりも作中人物の old Jolyon がいっそう前面に押し出され、独立した感情を持っているかの如き印象を受ける。Ah! She had taken her maiden name again! は Mrs. Irene Heron という名札を見つけたとき old Jolyon が受けた印象であり、She would not be in! And then—boots! What did he want with boots at his age? He could not wear out all those he had. は、ベルを押すまでの old Jolyon の心に浮かんだ考えの推移である。ただこの場合、前者には And somehow this pleased him.、後者には The thought was black. という作者の注釈がついている。このことによって読者は、作中人物の感情をいっそう明確に知ることができるが、その反面、読者の心に余韻を残すという効果は失われてしまう恐れもないわけではない。

2) At eighty-eight he was still sound, but suffering terribly from the thought that no one ever told him anything. It is, indeed, doubtful how he had become aware that Roger was being buried that day, for Emily had kept it from him. She was always keeping things from him. Emily was only seventy! James had a grudge against his wife's youth. He felt sometimes that he would never have married her if he had known that she would have so many years before her, when he had so few. It was not natural. She would live fifteen or twenty years after he was gone, and might spend a lot of money; she had always had extravagant tastes.

For all he know, she might want to buy one of these motor-cars. Cicely and Rachel and Imogen and all the young people—they all rode those bicycles now, and went off goodness knows where. And now Roger was gone. He didn't know—couldn't tell! The family was breaking up. Soames would know how much his uncle had left. Curiously, he thought of Roger as Somes's uncle, not as his own brother.¹⁾ Soames! It was more and more the one solid spot in a vanishing world.²⁾ Soames was careful; he was a warm man; but he had no one to leave his money to. There it was! He didn't know! And there was that fellow Chamberlain! For James's political principles had been fixed between '70 and '85 when 'that rascally Radical' had been the chief thorn in the side of property, and he distrusted him to this day, in spite of his conversion;³⁾ he would get the country into a mess, and make money go down before he had done with it. A stormy petrel of a chap! Where was Soames? He had gone to the funeral, of course, which they had tried to keep from him. He knew that perfectly well; he had seen his son's trousers. Roger! Roger in his coffin! He remembered how, when they came up from school together from the West, on the box seat of the old Slowflyer in 1824, Roger had got into the 'boot' and gone to sleep.⁴⁾

88歳に達した James は、家族の者さえ自分になにも話してくれない孤独に神経を高ぶらせ、悩み続ける。弟 Roger の葬儀の日も、息子 Soames の帰りを待ちながら物思いに耽っている。この章の題名 'James Sees Visions' でもわかるように、引用文は James の幻想を描写したものである。1行めの the thought, 5行めの felt が幻想へ移行する橋渡しの役目を果たしている。ただ、4行めからの She was always keeping things from him. Emily was only seventy! を James の考えととるか、作者の客観描写と考えるか微妙なところだが、もうすでに作中人物への感情移入が行なわれていると解釈したい。7行めの It was not natural. から、はっきりと James の幻想の中に入っていく。その幻想は、妻 Emily のことから、お金、自動車などへと止めどなく、自由奔放に移り変わっていくのであるが、ところどころに案内役として作者の解説 (1)、2)、3)、4)) を交えながら、約2頁にわたり描出話法を用いて描写されている。このように、幻想など渾沌とした精神状態の描写にとって描出話法は欠くことのできない手法のひとつといえよう。

以上、ほんの数例について検討したにすぎないが、The Forsyte Saga 全体を通し

て作者 Galsworthy は、従来の直接・間接話法に加えて、描出話法や不完全話法を用いることにより、描写の範囲を拡大しただけでなく、描写そのものを一段と多彩なものとしている。これらが、自然描写の美しさや抒情性と相まって、この作品全体に劇的効果を与えていることも見逃してはなるまい。

〔参考文献〕

- (1) 大塚高信：英文法論考
 - (2) 木原研三：英文法シリーズ「話法」
 - (3) 窪川英水：「近代小説技法としての話法」——文体論研究第4号
 - (5) 徳沢得二：「『体験話法』研究の沿革」「わが国における『体験話法』の研究」
：「『体験話法』小論」——明大文芸研究 No. 11~13
 - (6) Curme, George O. : *Syntax*
 - (7) Jespersen, O. : *The Philosophy of Grammar*
 - (8) Kruisinga, E. : *A Handbook of Present-day English*
 - (9) Palmer, Harold E. : *A Grammar of Spoken English*
 - (10) Funke, O. : *Zur 'Erlebten Rede' bei Galsworthy*——Englische Studien (1929)
 - (11) Karpf, F. : *Die Erlebte Rede im Englischen*——Anglia (1933)
- (なお本稿は、同人雑誌「ほらいずん」10号に寄稿した論文に加筆したものである)
- (ふせ としお 本学講師 英語)